

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 (教育学)	氏名	諏訪 英広
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p style="text-align: center;">教員評価における目標管理に関する学校経営学的研究 —ソーシャル・サポートの視点に基づく効果的運用に関する学校経営方策の探究—</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p style="text-align: center;">主 査 教 授 林 孝                  審査委員 教 授 鈴 木 由 美 子                  審査委員 教 授 栗 原 慎 二</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、ソーシャル・サポートの視点に基づく教員評価における目標管理の効果的運用に関する学校経営方策を提示することを目的としている。そのため、集団的・協働的な目標管理の運用を推奨するなど、他の自治体と異なる特徴を有する目標管理を実施しているという観点、及び調査協力者・校の獲得と調査の継続性という観点から、X県を研究対象として設定し、教員と校長とを対象とした定量的・定性的調査の結果を通じて、教員評価における目標管理の意義と運用方法に対する意識、目標管理の意義に対する意識に影響を及ぼす要因、及び目標管理の運用方法とソーシャル・サポートの実相を明らかにしている。</p> <p>論文の構成と概要は、次の通りである。</p> <p>序章「本研究の目的と方法」では、問題の所在を明らかにして、先行研究の精緻な検討を行い、研究課題を設定するとともに、本研究の意義、目的及び方法を明らかにしている。設定した研究課題は、第1に、目標管理の意義と運用方法に対する意識及び目標管理の意義に対する意識に影響を及ぼす要因について、特に、管理職を含めた同僚関係や相互支援関係に着目した分析を行うこと、第2に、校長や教員がいかなる点において目標管理の意義を感じており、目標管理がどのような方法で運用され、目標管理の意義に対する意識にどのような要因が影響を及ぼしているのかについて、実際の学校現場での営みや文脈に視点を置いた定性的調査データに基づいて、特に、校長—教員間及び教員間におけるソーシャル・サポートの視点から明らかにすることである。</p> <p>第1章「教員評価における目標管理に関する定量的調査に基づく検討」では、教員評価における目標管理に対する教員の意識に関する学校種間の比較検討と、校長の意識に関する学校種間の比較検討を行っている。その結果、学校種を問わず、信頼と支援的助言に支えられた管理職との肯定的な関係が目標管理の意義に対する意識に正の影響を及ぼすことを明らかにしている。とりわけ、小学校では組織目標を意識した同僚との関わり合いによる目標設定によって、中学校では凝集性と成長志向性の高い組織文化・風土の醸成によって、高校では専門性を活かした集団的・協働的営みを仕組む工夫によって、目標管理の意義に対する意識が向上する可能性を明らかにしている。</p>			

第2章から第4章では、小学校・中学校・高等学校それぞれにおける「目標管理に関する定性的調査に基づく検討」として、「教員集団と学校経営の特徴及び目標管理に関する基本姿勢」「目標管理の意義及び運用方法とソーシャル・サポートの実相」を明らかにしている。それらの検討を経て、第5章「目標管理に関する定性的調査の結果に基づく学校種間の比較検討」においては、教員集団と学校経営の特徴を明らかにして、目標管理の意義及び運用方法とソーシャル・サポートの実相について、学校種間の比較検討を行っている。3校種の事例校間の共通性と差異性という観点から比較検討を行った結果、全体的に、各事例校とも、学校の抱える課題を改善し、学校経営目標を実現するために、教員集団の特性や校長の抱く学校経営観に基づき、学校経営戦略のツールとして目標管理を上手く活用していた事例であることを明らかにした。また、校種の違いを超えた、目標管理に対する基本姿勢やその姿勢に基づく運用方法の工夫に関する共通的な「条件性」があり得るとの示唆を明らかにした。

最後に、終章「総合的考察と今後の研究課題」において、設定した2研究課題に即して本論文で明らかにした知見を整理し、総合的考察として、ソーシャル・サポートの視点に基づく目標管理の効果的運用に関する学校経営方策について提示するとともに、今後の研究課題について明らかにしている。ソーシャル・サポートの視点に基づく目標管理の効果的運用に関する学校経営方策について、第一に、校長は自身の学校経営観や具体的な学校経営実践に目標管理を有機的に関連付けるという明確な理念やビジョンのもと、組織の活性化、教員の資質能力の向上、職務意欲の向上といった、目標管理に求められている役割や機能を現実化させることに焦点化し、実践する必要があること、第二に、校長は教員との日常的なコミュニケーションによって教員との信頼関係を形成し、得られた情報に基づきながら、教員の自己目標に焦点を当てた指導助言を行い、教員の思いや悩み等を共有し、期待や賞賛の意思を明確に表明するなどの相互作用的なコミュニケーションを意図的に行う必要があること、第三に、校長は目標管理が個々の教員の心身の健康・職務上の困り感・思いや願い・成長イメージ等に関連付けられた実践となるために、教員と校長との二者関係のみで捉えるのではなく、校長を含めた同僚教員との関わり合いを必要とする工夫や取り組みを実践する必要があることを示している。

本論文は、次の3点において高く評価できる。

1. 定量的・定性的データに基づき、目標管理の意義に対する意識に影響を及ぼす要因を明らかにし、ソーシャル・サポートという視点から学校組織という特性に適した目標管理の運用方法に関する学校経営的方策を提示したことである。
2. 教員評価における目標管理のもつ意義について、ソーシャル・サポートという視点から目標管理を捉え運用することによって、職務意欲や相互支援・信頼関係が向上し、結果として、本来目標管理に期待される組織の活性化や教員の資質能力の向上につながることを定量的・定性的データに基づき実証したことである。
3. 集団的・協働的営みに教員集団の特徴がある学校組織において、目標管理を個人的・個別的営みのみでなく、校長を含む同僚関係における集団的・協働的営みとして捉えることの重要性を実証したことである。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成29年 7月20日